様式 C-7-2

自己評価報告書

平成 23 年 4 月 12 日現在

機関番号：33918
研究種目：基盤研究（C）
研究期間：2008～2012
課題番号：20530647
研究課題名（和文）過酷な体験の語りが支援者／研究者に与える心理的影響

研究課題名（英文）Psychological Effects of Traumatic Experience Narratives to a Helper and a Researcher

研究代表者
山口　智子（YAMAGUCHI SATOKO）
日本福祉大学・社会福祉学部・教授
研究者番号：00335019

研究分野：臨床心理学・生涯発達心理学
科研費の分科・細目：心理学・臨床心理学
キーワード：語り、ナラティブ、心理的影響、支援者、研究者

１．研究計画の概要

「過酷な体験の語りが支援者／研究者に与える心理的影響」に関する研究は、臨床心理学、社会心理学、発達心理学など多領域にわたる。具体的なテーマは、支援者としては、①被害者支援、②就労者のメンタルヘルス（バーアウト研究などを含む）などであり、研究者としては、③インタビュー調査における聴き手の役割などである。しかし、これらの研究について、相互の交流は行われておらず、知見を総括する検討は行われていない。

そこで、本研究の目的は、①過酷な体験の語りが支援者／研究者に与える心理的影響に関するこれまでの知見を総括し、②検討が不十分な領域での研究を補完し、③支援者／研究者の心理的影響を理解し、過重な負担があれば、それを軽減する方法を検討することである。

目的と実施計画は以下の通りである。

目的１：過酷な体験の語りが支援者／研究者に与える心理的影響について、知見を総括する。（2008 年度）

目的２：支援者として過酷な体験を聴くことの心理的影響について検討する。（2009～2010 年度）

目的３：研究者として過酷な体験を聴くことの心理的影響について検討する。（2010 年度～2011 年度）

目的４：支援者／研究者の過重な負担について、軽減する方法を検討する。（2012 年度）

２．研究の進捗状況

(1)目的１について：支援者の心理的影響については①PTSD(外傷後ストレス障害）や被害者支援関係の文献収集、②調査方法として面接法を用いた質的研究、③質問紙調査で用いる PTSD のチェックリスト、④PTSD の重篤度について観察方法について、情報収集を行い、研究の方向性を検討した。研究者の心理的影響については、図書『自己心理学１：自己心理学研究の歴史と方法』に「面接法を用いた質的研究」をまとめ、面接法を用いた質的研究の可能性と危険性について論じた。

(2)目的２について：①犯罪被害者に対する支援の実践について研究会において、事例検討を行った。②DV 支援者へのグループインタビューを行い、支援者への心理的影響を検討し、「DV 相談における支援者の「語り」－過酷な体験の語りを聴くことによる心理的影響」としてまとめた（日本発達心理学会第 22 回大会)。③認知症高齢者の支援に関する知見を、大学の心理臨床研究センター紀要および研究会の紀要としてまとめた。ここでは、高齢者の語りを聴く２つの視点として、未解決の葛藤に着目するライフレビューの視点と物語の視点を挙げ、特に、後期高齢者、認知症高齢者に対しては物語の視点が重要であることを指摘した。これは近年、エリクソンの第９段階に指摘とも関連すると考えられ

る。

(3)目的３について：研究者への心理的影響については、日本発達心理学会第 21 回大会において、「過酷な体験の語りの聴き手/研究者であること」を企画し、話題提供として「犯罪被害者の語りの力：インタビューをしないという選択」の発表を行った。急速な犯罪被害者支援状況の変化と被害者の生々しい語りが研究者に与える心理的影響（代理受傷を含む）について論じた。

(4)目的４について：未着手である。

３．現在までの達成度

②おおむね順調に進展している。

（理由）研究テーマが広範なフィールドを対象としたものであり、すべてを網羅することはできない。しかし、具体的な研究では目的を絞った研究を行うとともに、他領域の情報収集を同時に行うことで重層的な検討を試みることができる。

４．今後の研究の推進方策

研究計画では、2011 年度は研究者への心理的影響を検討し、2012 年度には研究を総括し、支援者および研究者の心理的負担の軽減について検討する予定である。

しかし、2011 年 3 月 11 日の東北地方を襲った地震および原子力発電所の問題という未曾有の災害が起こっており、多くの人々が過酷な体験を余儀なくされている。この状況を踏まえ、今後の研究の推進方策を慎重に検討する必要がある。

５．　代表的な研究成果

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計３件）

(1) 山口智子　高齢者のライフレビューに関する研究と実践―語りを理解する 2 つの視点と日常場面への展開　自己心理学研究（査読有）4　2011　1-17

(2) 山口智子　＜小講演記録＞高齢者のライフレヴューの語りと心理臨床　広島大学大学院心理臨床教育研究センター紀要（査読無）8　2010　11-18

〔学会発表〕（計３件）

(1) 山口智子　DV 相談における支援者の「語り」－過酷な体験の語りを聴くことによる心理的影響　日本発達心理学会第 22 回大会　2011.3.26　東京

(2) 山口智子・安田裕子・川野健治、能智正博、やまだようこ、森岡正芳　ラウンドテーブル「過酷な体験の語りの聴き手/研究者であること」　日本発達心理学会第 21 回大会　2010.3.2　神戸

〔図書〕（計１件）

(1) 山口智子　面接法を用いた質的研究　榎本博明、岡田努、下斗米淳監修　自己心理学１　自己心理学研究の歴史と方法　金子書房　2008　150-165